



扱っているイッテルビウム原子はたまたま可視光の遷移をたくさん持っているので、結果として実験室は遊園地みたいになっています。

少し間が開きましたが、留学報告書を書かせていただきます。

中学時代の好きだった国語の教師は駄洒落好きでした。でも駄洒落の合間に挟まる人生論が魅力の教師でした。その中で、25までに一流になれなかったら守りを考えた方がいいという話をしていたことを思い出します。その時僕は「とりあえず25になるまでは守りを考えず思いっきり生きてみよう」思ったものでした。そして、守りを考えるには25はまだ早いだろとも。将来団子屋を開いて暮らすという夢を語っていたあの教師は今元気になっているのでしょうか。

さてとは言ったものの、25の誕生日が一週間以内に迫る中、今回は僕なりに守りについて考えてみます。中学時代の自分が思ったように、自分の好きなことをするという意味ではまだ守りを考えるつもりはサラサラありません。しかし、コンスタントに生きるという意味では常に守りを考えなければいけないと思っています。全ての体力を一回で使い切り、燃え尽き、やめてしまった時と、コンスタントに何かを続けた時とでは後者の方がより多くの成果を出すに至ることは明白です。このコンテキストで、研究生活がマラソンに例えられることも多いですね。しかし、これを実践するのはなかなか難しいものです。僕にはまだその精神は身につけていません。僕の研究生活はまだどうしてもインターバルトレーニングのようになってしまいます。エキサイティングな時にグーオーっと力を使い果たし、徹夜し、

次の週ぐらいに風邪をひきかけるという生活を繰り返してしまいます。そんな時に、参考になるのがポスドクのアレックと指導教官のアダムです。

僕の研究室の現在のポスドク二人は僕や他の大学院生のラボメイトとは対照的にどちらも九時五時出勤です。そのうち一人のアレックというポスドクは、九時五時にも関わらず、その日その日で本質的なプロジェクトを考えて、解決することを繰り返しています。そして休日はスキーに行ったり旅行に行ったりしてしっかりと休む。彼のコンスタントに着々と生きている生き様はマラソンを思い起こさせます。楽しいから研究者として生きていて、楽しくなくなるまで体力を使って研究をしたら本末転倒なのです。最も身近な人間の一人だけあり、彼の姿勢はそのまま取り入れやすく、参考になります。もうすぐサーフィンをするためにカリフォルニアの量子系の会社に就職してしまいますが、チルな感じでガンガン研究成果を出すアレックのような存在に出会えたのは本当に幸せです。

対して、僕の指導教官は端から見るとずっと百メートル走のペースで走っているように見えるのですが、彼も彼なりにマラソンを走っています。行き帰りを自転車にしてみたり、家庭菜園をしていたり、小さな赤ちゃんを可愛がっていたり、プライベートを大切にしている様子が垣間見えます。プライベートを大切にしているからこそ、仕事をしているときは全力疾走をしているように見えるのでしょうか。深夜にも関わらず、実験ノートのコメントをリアルタイムで送ってきたりして、少しアレックよりもワークライフバランスが壊滅している感はありますが、それは彼にとって実験について考えることが趣味のうちだからなのでしょう。僕も彼のように趣味として科学を楽しむ側面も大切にしたいと思います。

全く違う姿勢でマラソンを走っている二人ですが、彼らはそれぞれの形で楽しんで人生を生きています。大学院生生活のこの時期は、自分のフォームを見つけることが焦って目先の成果を出すことよりも重要なのだということを、忘れないように生きていきたいです。(アダムからのガンガンくるプレッシャーを強い気持ちで諫めながら 笑)

事務報告

- 授業について、前期はとても良い統計力学の授業をとることができました。教授のレオは物理の本質を理解するということにとっても重きを置いていて、僕とモチベーションが似ていたものめり込める一つの理由でした。そして後期はアダムの量子光学の授業でした、僕にとっては日々使っていることの復習の面もおっきかったです。また、新たな学びもありました。また、大体の興味も似ていることから、彼の宿題はうーん楽しい！となるトピックばかりでよかったです。
- 研究について、[大学院2本目の論文がアーカイブ](#)に上がりました。もう一人のラボメイトがファーストオーサーですが、メインのデータのうち半分以上は僕がとったり、一つのフィギュアを占めている新しアイデアは僕がシミュレーションをするうちに発見したもので、前回の初論文とは意味合いが違います。次は僕が主体でプロジェクトを進めていく予定なので、(コンスタントに)頑張っていこうと思います。
- 今はボストン近郊で開かれる学会へ向かう途中の空港です。今年はスペインへのワークショップなどもいけそうで、高校生の時に夢見ていた世界を飛び回りながら色々な人に会う、そして自分でも一流の研究をする。という夢のような研究生生活を送れているのだなと改めて感じる次第です。